

音楽表現へつなげるための読譜力育成の試み 2

— 3度音程に着目した学習の実践 —

Teaching Practice for Nurturing Students' skills of Music Reading for Musical Expressions 2
— The Practice of Learning with Attention on Interval the 3rd —

内 山 尚 美

1. はじめに

本稿は保育者養成課程において、音楽表現に必要なピアノ演奏技術へ結びつける読譜力育成のための具体的方策を探るものである。

平成29年度告示の幼稚園教育要領等において、領域「表現」の内容の取扱いの(3)には「表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること」とある。この領域「表現」に関わる活動において重要なことは作品などの結果ではなく、そこに至る「過程」である。

保育の現場で行われている音楽表現活動は実に様々である。マクドナルド&サイモンズ(2003)によれば、乳幼児の音楽プログラムの効果に貢献する多くの構成要素の中で最重要なものが教師であり、教師の音楽的スキルは必要不可欠である。その音楽的スキルにおいて保育者として必要とされるのは、乳幼児の表現の萌芽を各々の音楽表現へ導き、その過程を大切に育むことのできる力であると共に、その過程における目的を達成させる力である。そして保育・教育の現場において音楽は手段であると共に目的でもある。手段だけで良いとするならば、読譜力は必ずしも欠かせない音楽スキルであると断定することはできない。しかし目的でもあるためには、保育者にとって不可欠な音楽能力であることは自明である。

したがって保育者養成課程においても、読譜力の習得は必要であると考えられる。しかし近年の入学者はピアノ初学者が増加傾向にある。その要因の一つとして、保育者養成課程入学以前の公教育において読譜力を定着できているとは言い難い現状があることも確かである(小川, 2005)。そのため多くの保育者養成課程において読譜指導の実践や研究は様々に行われている。その中でもワークシートを用いた実践は多く、野口・坂井(2010)は読譜力を伴った演奏力の育成の困難さから、「音高に絞った読譜力訓練」「短時間で単純な方法による一斉実施」「読譜力の伸張を学生が実感できること」という3点に絞った譜読みのワークシートを行っている。そして藤原(2018)は保育士養成・教員養成課程におけるピアノ学習の読譜(知識)においては、楽譜情報を速やかに音高として変換できていないことを指摘している。

読譜には様々な音楽要素が含まれている。読譜の手順としては、ほとんどの音楽学習者は先ず音高の把握を行い、続いてリズム、拍子の順序で楽譜の情報を把握していく。そのため、最初の過程

である音高の認識がスムーズに行えることによって、ピアノ初学者の音楽に対する苦手意識が軽減され、モチベーションの向上を促すことができると考えることが可能である。

したがって音高の把握に慣れて読譜を容易にすることは、数多くの楽曲に触れることが可能となる。そしてフレーズやパッセージのパターン経験値を増加させることにもなり、実際の楽曲における旋律のフレーズの認識へ繋がると考えることもできよう。

これらのことから、ピアノ初学者に対して音高における認識力を高めることが読譜力養成の最も根源的なことであり、読譜力を養成することの意義でもあると考える。加えてピアノ初学者に限らず経験者に対しても、ピアノの初見試奏において必要な能力として音高に着目した研究が必要であることを向田（2012）は述べている。

そこで保育者養成課程において短期間で読譜力を習得させるための方策を探るために、保育現場で用いられている楽曲には3度音程が多用されていることに着目した（内山，2015）。これまでの3度音程を用いたワークシートによる授業実践の結果、ワークシート実施の回数を重ねるごとに得点が上昇し、更にピアノ初学者の最終回（第11回）での得点平均点がピアノ経験者の初回平均点を上回る平均点を得られたことから、ワークシートによる実践の有効性が明らかになっている。また読譜力を得点として可視化することによって、読譜力向上の自己認識と音楽学習に対する意欲向上も確認ができています（内山，2019）。

更に今回は効果的な方策を探るべく、読譜時の視覚的手掛かりとなるような要素にも着目した。そして授業実践を通して、単音認識のワークシートの内容の比較を行うことを試みた。

2. 楽譜の先読みを導く読譜力育成

前述の通り保育者養成課程におけるピアノ初学者に対して、いかに短期間でピアノ演奏技術を習得させられるかが課題となっている。それは基礎技術定着の上に音楽表現力が育まれるものであり、それが保育者として必要とされるものだからである。

J.L.マーセル、M.グレーンによると、楽譜習得の適切な方法について「常に実際の音楽を通じて行わねばならない」（1965.p.173）と述べられており、加えて記譜法を理解する媒介とするために特に器楽を用いることについては、とうてい歌唱には及ばないことを示している。そしてその理由として「技術の習得が目前の課題であり、したがって学習の注意力がその点に集中する結果、それが他の活動を阻害するからである」（1965.p.174）と述べている。これは、前述した野口・坂井の「読譜力を伴った演奏力の育成の困難さ」という主張を裏付けするものであろう。

しかし保育者養成課程における学修期間を鑑みると、読譜力と同時にピアノ演奏技術に必要とされる力を育むことが望まれる。そこで読譜力育成に加えることのできるピアノ演奏技術へ繋ぐ要素として、視覚的手掛かりである「先読み」に着目した。

ピアノ演奏時の視線行動においては、初学者は単音を認識し、学習を重ねるにつれてフレーズを認識する傾向であることが明らかになっている。読譜時における視覚的手掛かりである先読みにつ

いて長井・野中（2015）は、演奏が熟達していない状態では楽譜を見るときに一音一音に注意が向き、演奏とともに視線が楽譜を追っていくが故に停留時間が短くばらつきが少なく少ないと考えられるが、その後、注意の向け方は一音ずつではなく大きな音のまとまりに変化していくことを述べている。また河内・村松（2019）は、音楽経験者の「短い視線停留時間」且つ「少ない視線停留回数」による読譜が「音符のグループ」や「有効な単位」を素早く知覚する際の特徴であるため、音楽未経験者に対する読譜指導において個々の音符に対する音高やリズム理解とともに、複数の音符群に対する瞬間的な理解を促すような指導が有効となることを示唆している。

そこで読譜時における視覚的手掛かりの要素の中でも、ピアノ演奏時の視線である所謂“先読み”にも着目し、“先読み力”を単音単独の読譜力と同時に習得できるようなワークシート「読譜トレーニング」の試作及び実践を行った。

3. ワークシートを用いた授業実践

3. 1. 実践の対象と期間

実践の対象は、A短期大学保育科1年生「音楽Ⅰ（声楽）」（1年次後期開講）履修者142名であり、実践の期間は、2019年9月17日から2019年12月12日までである。

対象者の音楽関連科目の履修状況については、1年次前期に「音楽Ⅰ（音楽理論）」「音楽Ⅰ（ピアノ）」を履修した上で、当該科目「音楽Ⅰ（声楽）」を履修することになっている。「音楽Ⅰ（ピアノ）」は1年次通年開講であるため、1年次後期においても当該科目と並行して継続履修することとなる。引き続き2年次には通年科目として「音楽Ⅱ（幼児音楽）」と「音楽Ⅱ（ピアノ）」を履修することになっている⁽¹⁾。なお「音楽Ⅰ（声楽）」第一講時における履修者のピアノ進度（バイエル）は図1の通りである。

保育者として必要とされるピアノ演奏技術は、最低限バイエル終了以上とされている。今回の実践対象であるA短期大学保育科においては、「音楽Ⅰ（ピアノ）」の1 Semester 終了時に全体の約3割程度がそのレベルに到達していることになるが、換言すると約7割は未到達であることが把握できる。そのため多くの保育者養成課程においては、ピアノ実技に関する科目を2 Semester 以上設置し実施していること

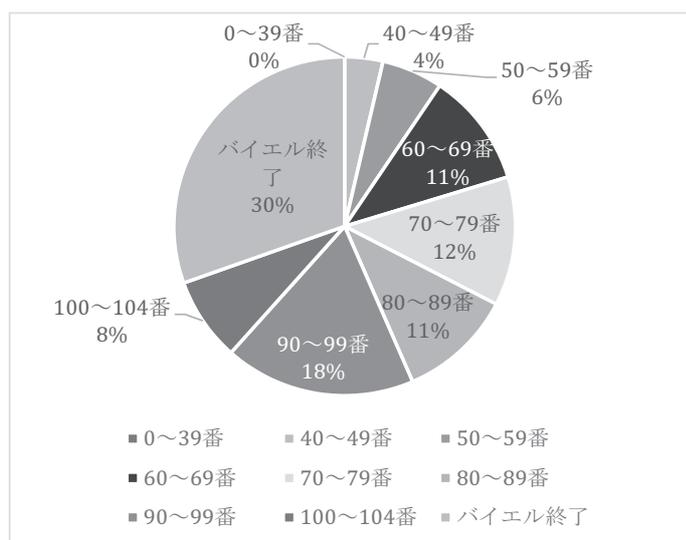


図1；ピアノ進度（バイエル）

が非常に多い（宮脇，2001）。しかも前述の通り入学時のピアノ初学者初級者の割合が増加している昨今は、2 Semester のピアノ実技関係科目を受講しても単位を取得できない学習者がいること

が、多くの保育者養成課程が抱える課題の一つとなっている。今回の取り組みは、それを可能な限り補う役割において「読譜力」に特化した教育方法を探求していく。

なお倫理的配慮として、授業実践対象であるA短期大学保育科1年生「音楽Ⅰ（声楽）」142名に対し、事前事後のアンケート調査やワークシート「読譜トレーニング」の得点は授業評価の対象外であるため不利益を与えることがないことを説明した上で調査を実施した。

3. 2. 実践の内容

3. 2. 1. 「読譜トレーニング」について

授業開始時において「読譜トレーニング」と称したワークシート（譜例1）を実施した。1回あたりの制限時間を30秒に設定し、授業内実技発表などを除いた授業において全10回行った。

ワークシートの実践方法は、受講生を二つのグループに分けて行った。そして同一問題を異なる二種類の解答形式で行うこととした。解答形式の一つは、示された音をそのまま読譜してイタリア音名で解答する形式である。これを「単純読譜」と呼ぶこととし、この方法で解答するグループを「単純読譜群」とした。もう一つは、示された音の3度上の音をイタリア音名で解答する形式であり、これを「3度音程読譜」と呼ぶこととし、この方法で解答するグループを「3度音程読譜群」とした。

問題は第1問目を中央ハから開始し、前後の度数差が3度音程を中心になるように幹音のみを用いて出題した。したがって多くの場合は3度音程読譜の解答が次の出題問題となるということである。この意図としては、新曲試奏や新曲視唱時における学習者の視線を解答箇所留めることなく、次問題へ誘導させることである。所謂、読譜時における先読みのためのアフォードランスの要素を取り入れた。更に子どもの歌において良く使用される高音部譜表と低音部譜表に慣れさせるために、8問毎に異なる二種類の譜表を交互に設定した。高音部譜表は保育者養成課程入学以前の公教育の中でもよく目にしたり触れたりすることが多いため、学習者にとってモチベーションを上げる結果を得られると推察できる。したがって先ず高音部譜表8題、続いて低音部譜表8題を交互に反復し、全80題を出題した。

以上の観点で作成したワークシート問題を10回行ったのち、読譜力の定着具合を確認するために両群共通問題として子どもの歌による単純読譜を実施した。その結果を通して、効果的な読譜指導の方策を検証した。

譜例1；「読譜トレーニング」

3. 2. 2. 「読譜トレーニング」平均点の推移

次に「読譜トレーニング」の平均点推移を図2へ示す。

「読譜トレーニング」における第1回の平均点は、単純読譜群が21.5点、3度音程読譜群が12.9点であり、その差は8.6点であった。その後第2回から第10回までにおいては、第1回の平均点と同様に概ね8点の差を保ちながら両群ともに上昇する傾向がみられた。しかし両群ともに第5回と第9、10回において

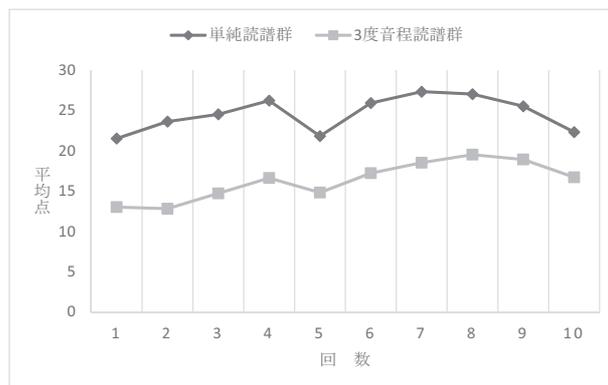


図2; 「読譜トレーニング」平均点推移

平均点の低下がみられ、おおよそ5回毎に平均点の下降している現象がうかがえた。

平均点の下降幅においては、単純読譜群が第5回4.4点（第1回から第4回までの最高平均点との差）、第10回5.0点（第6回から第9回までの最高平均点との差）であったのに対し、3度音程読譜群では第5回1.8点（第1回から第4回までの最高平均点との差）、第10回2.8点（第6回から第9回までの最高得点との差）であった。

また第8回の後には二週間の教育実習（幼稚園）が実施されたため、第8回と第9回との間隔が通常の一週間よりも長い三週間となった。その長期間のインターバルの後である第9回には平均点の下降する現象が表れた。

次に単純読譜群におけるピアノ進度別の平均点推移（図3）によると、全体の平均点推移と同様にすべてのピアノ進度レベルにおいて二度のプラトー現象が表れている。そしてピアノ進度別の平均点差においては、バイエル90番台までとバイエル100番台以上との間に若干の隔たりが見受けられるが、大きな隔たりはない。

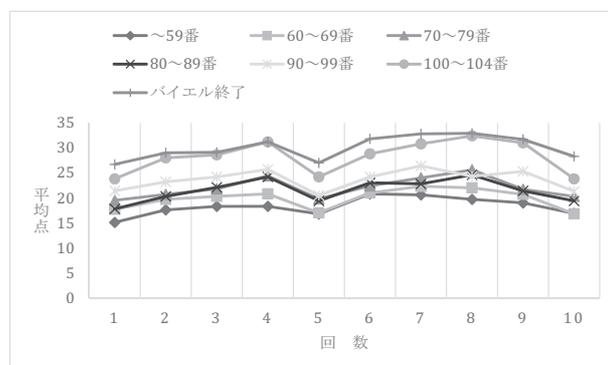


図3; 単純読譜ピアノ進度別「読譜トレーニング」平均点推移

また「読譜トレーニング」全体の平均点推移と同様に、第8回の後には教育実習（幼稚園）が実施されたため、この長期間のインターバル後である第9回には平均点の下降がうかがわれた。

一方、3度音程読譜群におけるピアノ進度別の平均点推移（図4）からは、バイエル60番台までの平均点推移とバイエル70番台以降との間に大きな隔たりが見受けられ、二分さ

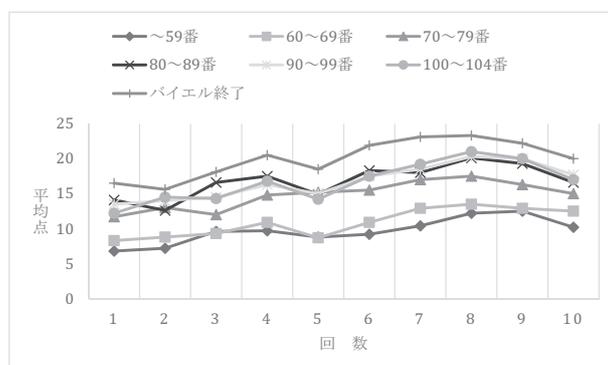


図4; 3度音程読譜ピアノ進度別「読譜トレーニング」平均点推移

れていることが明確である。また前出二種類の全体の平均点推移と同様に、3度音程読譜群においてもすべてのピアノ進度レベルにおいて二度のプラトー現象が表れていた。そして第8回の後の長い間隔のインターバル後である第9回の平均点が下降した。

3. 3. 実践の検証—「子どもの歌による単純読譜」得点結果

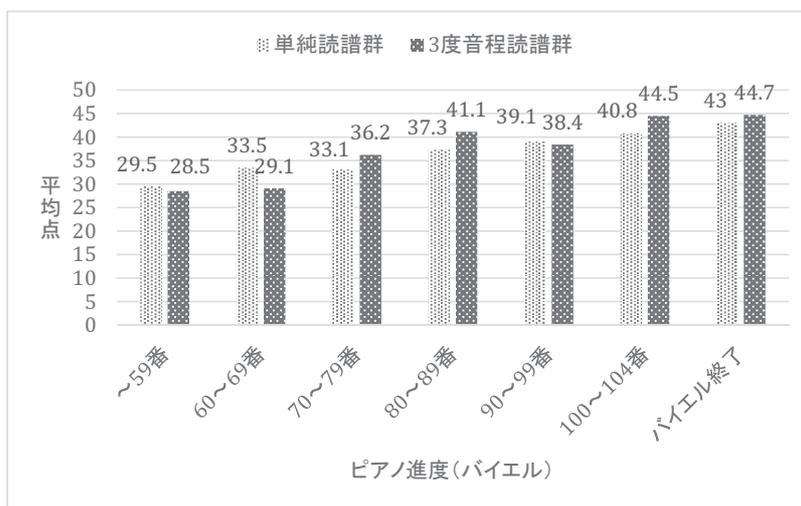
全10回の読譜トレーニング終了後に、「子どもの歌による単純読譜」を「読譜トレーニング11」として実施し、実践の検証を行った。制限時間はこれまでの「読譜トレーニング」と同様に30秒に設定し、示された音をそのままイタリア音名で解答する単純読譜で行った。

この「子どもの歌による単純読譜」で用いる楽曲は次の3つの条件において選曲した。まず、保育でよく用いられている曲であることである。そして2点目は、「読譜トレーニング」では幹音による学習であったことから、調号や臨時記号が出来る限り使用されていない曲であること。加えて3点目は、受講生に周知されていない楽曲であること。これらの条件のもと、用いた楽曲は「ドロップスのうた」（まどみちお作詞、大中恩作曲）の旋律である（譜例2）⁽²⁾。



譜例2；「子どもの歌による単純読譜」

この「子どもの歌による単純読譜」平均点は、単純読譜群が38.2点、3度音程読譜群が39.2点という結果であり、約1点の差異が認められた。更にピアノ進度別の単純読譜群と3度音程読譜群の平均点については図5のような結果が得られた。



平均点の最も低いものは

「3度音程読譜群バイエル59番以下」の28.5点であり、それに対して最も高い平均点は「3度音程読譜群バイエル終了」の44.7点であり、16.2点という大きな差が生じた。

またバイエル69番以下では、3度音程読譜群より単純読譜群の方が1～4.4点の高い得点であった。それに対してバイエル70番以上においては、バイエル90番台において0.7点の逆転が見られるもののその他のピアノ進度では、3度音程読譜群が1.7～3.8点の高い得点であった。

またバイエル69番以下では、3度音程読譜群より単純読譜群の方が1～4.4点の高い得点であった。それに対してバイエル70番以上においては、バイエル90番台において0.7点の逆転が見られるもののその他のピアノ進度では、3度音程読譜群が1.7～3.8点の高い得点であった。

3. 4. 結果と考察

平均点は読譜トレーニングの回数を重ねるごとに概ね上昇していることが確認された。そして受講者の意識を調査した事後アンケートによると、「読譜トレーニング」の取り組み意欲については「とても意欲的」59%、「少し意欲的」31%、「普通」9%、「あまり意欲的でなかった」1%、「全然意欲的でなかった」0%という結果であった。事後アンケートの自由記述にも「点数を上げようと頑張れた」「少しずつ（得点が）上がっていく達成感が分かり、苦手な音域も読めるようになった」「楽譜が全く読めなかったけれど、だんだん読めるようになっていくのが実感できた」という感想があり、これまでの研究結果（内山，2019）と同様に時間的芸術である音楽を得点という形で可視化することによって客観的に認識することができ、他者との比較ではなく自己の時系列による比較によって、取り組みに対するモチベーションを生ずることに繋がったのではないかと推察される。

しかし読譜トレーニングの実施期間中、単純読譜群、3度音程読譜群ともに第5回では平均点の低下が認められ、更に第9回及び第10回にも平均点の低下が両群に認められた。この現象は先行研究やこれまでの筆者の同様の調査においても同じ様子が見受けられ、プラトー現象であることが考えられる。このことからプラトー現象を脱するまで継続的に実施することが、読譜力の向上を自己認識しやすくなるために必要であると考えられる。それは事後アンケート結果にも表れており、得点変化に対する自己認識が「大いに上昇」5%、「少し上昇」82%、「変化なし」12%、「少し下降」1%、「大いに下降」0%という結果であり、13%の受講者が得点の上昇を自己認識できなかったと回答している。

そして第10回の平均点は、単純読譜群が第1回とほぼ同じ平均点まで下降しているのに対し、3度音程読譜群は第1回平均点までの下降は見られなかった。したがって3度音程読譜群の方が点数の低下が少ないことから、3度音程読譜によって習得した読譜力が定着および継続されていることを示唆していると考えられる。

更に両群におけるバイエル進度別の平均点推移からは、単純読譜群においては進度毎の平均点幅に同程度の隔たりが見受けられた。単純読譜による「読譜トレーニング」には先読みの要素は含まれていないため、フレーズや音符のグループ認識に関連する要素よりも、単音認識の要素が強いものである。したがって各ピアノ進度別の平均点差こそあるが大きな隔たりは見受けられないのは、カテゴリー認識の差ではなく、単純に経験値の差と考えても良いのではないだろうかと推察される。

それに対して3度音程読譜群においてはバイエル60番台を境に平均点幅に大きな隔たりが生じた結果となった。この3度音程読譜による「読譜トレーニング」には、視線を解答箇所留めずに次問題へ誘導させることを意図した。そこで、ピアノ演奏時の視線行動において音楽経験者がフレーズを認識する傾向であることが明らかになっていることから、バイエル60番台を境として視線行動において単音認識とフレーズ認識の区別がなされているのではないかと考えることが可能であろう。

また読譜トレーニングの実施日においては、教育実習による3週間のブランク期間の後に平均点の低下が見られたため、当然ながら等間隔での継続した学習が有効的であることも明らかとなった。

そして実践の検証として最後に実施した共通問題「子どものうたによる単純読譜」では、3度音程読譜群が単純読譜群よりも約1点の高得点を獲得していたことから、3度音程読譜がより読譜力の育成に有効的ではないかと推察される。しかしピアノ進度別の得点においては、バイエル60番台までの学習者においては単純読譜群の方が高得点であるのに対し、バイエル70番以降の学習者では3度音程読譜群の方が高い点数を得たことが明らかになった。この結果からもバイエル60番台を境に、視線行動における単音認識とフレーズ認識の区別がなされていることは十分考えられる。

したがってバイエル60番台までのピアノ学習者に対しては単純読譜による読譜トレーニング、バイエル70番台以降のピアノ学習者においては3度音程読譜による読譜トレーニングが有効的であることが把握できた。つまりピアノ学習進度に応じて、ワークシートによる読譜力育成に異なったアプローチが効果的であるとみなすことができる。

そしてピアノ演奏時の視線行動、所謂“先読み”の要素に関しては、バイエル60番台までの学習者においては初学者と同様に単音を認識しているため、単純読譜の有効的な結果になったのではないかと推察できる。それに対してバイエル70番台以降の学習者が3度音程読譜による有効性が明らかであったことは、3度音程読譜による先読み力の育成が可能であることを示唆できるのではないだろうか。

この結果はバイエルの音楽要素や内容などとの関連性も考えられる。バイエル60番台までは、学習者は白鍵で演奏ができるようになっており、70番台以降では調号、臨時記号が用いられ、かつ転調を伴う楽曲が出現するなどというように音楽理論面でより高度な知識を伴う内容となっている。そのためバイエル60番台を境に、学習者の楽曲に対する認識が変化することも考えられる。

この「読譜トレーニング」の取り組みを通して、受講者の約9割が読譜力向上の実感を持っており、歌やピアノの譜読みが楽になったということを約8割の受講生が回答していた⁽³⁾。これは自由記述においても表れており、「ピアノ曲や弾き歌いの時の読譜が楽になった」「ヘ音記号をスラスラ読めるようになった」「音名を（楽譜に）書かなくても読めることが増えた」という感想が見られた。そして「今までは一つ一つの音符を『ド、レ、ミ…』と数えていたが、パッと音分かるようになった」という感想も見られたことから、楽譜という記号と音高の認識が結びついたのではないかと考えられる。

そればかりか「ピアノ演奏の際にミスタッチが減った」「ピアノを弾くときに少し余裕を持てるようになった」「スムーズにピアノ練習に取り組めるようになった」「きちんと読む癖がついて、ピアノ練習の時の見間違いや弾き間違いが減った」などというように読譜力の定着がピアノ演奏技術への結び付きを示唆しているような感想も見受けられた。この「読譜トレーニング」の取り組みによってピアノ演奏技術の習得に対して前向きに取り組めるようになり、学習者が技術の先にある表現に対する意識へ向けられるようになって欲しいと考える。

4. まとめと今後の課題

これまで保育者養成課程において、音楽表現に必要なピアノ演奏技術へ結びつける読譜力育成のための具体的方策として3度音程に着目したワークシート実践を試みてきた。今回は更に効果的な方策を探るべく、読譜時の視覚的手掛かりとなるような要素にも着目した単音認識のワークシート実践との比較を行った。

その結果、学習者のピアノ進歩（バイエル）のレベルによって、読譜力育成の異なる要素を用いる方法が効果的であることが明らかになった。具体的には、バイエル60番台までの学習者は単純読譜によるワークシート、それ以降の学習者には3度音程読譜によるワークシートを用いることが高い効果が得られるということが把握できた。

ただ「読譜トレーニング」の実施回数を10回としたがために、2度目のプラトー現象がうかがわれる地点において「読譜トレーニング」を終了することとなった。これによって学習者の手応えとしては得点の下降傾向にある状況であり、読譜力の定着向上に対して良いイメージを認識できにくかった可能性が考えられる。そのため、今後はプラトー現象の表れる時期を回避することに配慮した実施回数などについても改善の余地がある。

また実践の検証としての「子どもの歌による単純読譜」で用いた楽曲については、楽曲中において同音連打が数か所存在したため、検証の精度に若干の疑問が残った。次回は用いる楽曲の条件を改めて精査したいと考える。

今後は今回の結果を踏まえて読譜力育成のためのワークシートに改善を重ね、より短期間で効果的な読譜指導の方策を探っていきたいと考える。そしてワークシートによる読譜力育成成果をピアノ演奏実技へ結びつける方策の検討へ進めていきたいと考える。

※本研究は日本保育者養成教育学会第4回研究大会（2020年3月1日）における発表内容（コロナウィルス感染症拡大防止の特別措置により日本保育者養成教育学会研究発表認定委員会にて認定）に加筆・修正を加えたものである。

注

⁽¹⁾この他に音楽関連科目として「保育内容指導法表現Ⅰ（幼児と表現）」、「保育内容指導法表現Ⅱ」がある。

⁽²⁾前年度同科目受講生への調査では、既知の受講生は1割以下であった。

⁽³⁾受講者に対して「読譜トレーニング」の取り組みについての事後アンケートを2019年12月10、12日に実施した。「読譜力が付いた実感」については、「とても付いた」18%、「少し付いた」69%、「変化なし」13%の回答を得た。また、「譜読みが楽になったか」については、「とても楽になった」16%、「少し楽になった」65%、「変化なし」19%であった。

文献

- 岩口撰子（2008）「保育者養成における音楽教育の基礎研究(2)簡易読譜力調査を通して」『相愛大学研究論集』第24巻，pp.191-213.
- 内山尚美（2015）「ピアノ導入期におけるソルフェージュ指導の試み—3度音程に着目して—」『東海学院大学短期大学部紀要』第41号，pp.89-95.
- 内山尚美（2019）「音楽表現へつなげるための読譜力育成の試み—音楽Ⅰ（声楽）における授業実践を通して—」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第41号，pp.159-170.
- 小川容子（2005）「公教育における音名唱指導の実態—質問紙調査による移動ド・固定ド唱法の比較—」『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第1巻第2号，pp.41-53.
- 河内勇、村松京子（2019）「初等教員養成課程学生の初見視唱直前における読譜の視線分析研究」『教育実践学研究』第20巻2号，pp.15-26.
- 城戸透、森山伸、岸啓子、横山詔八（2003）「ピアノ・エチュードの体系的研究Ⅱ バイエルの研究（2）」『愛媛大学教育学部紀要教育科学』第50巻第1号，pp.119-138.
- 四家昌博、菊地真知子、岩淵撰子（2014）「本学の保育者養成課程におけるピアノ指導の課題と展望—カリキュラムの見直しと学生のアンケートの結果から—」『仙台白百合女子大学紀要』第18巻，pp.107-118.
- 辻陽子、伊東陽、安久津太一（2019）「保育者養成課程におけるピアノ指導の意義—最近10年間の研究動向を通して—」『岡山県立大学教育研究紀要』第4巻1号，pp.1-10.
- 長井りら、野中哲士（2015）「ピアノ演奏熟達過程における読譜視線の発達的变化と曲の構造との関係」『2015年度日本認知科学会第32回大会要旨集』pp.430-433.
- 丹羽裕紀子（2017）「ソルフェージュを用いた初心者へのバイエル指導法」『人間文化研究』第28号，pp.171-187.
- 野口美乃里、坂井加奈（2010）「ピアノ授業における新しい取り組み—譜読みタイム・ポイント制・ワークシートの導入—」『永原学園西九州大学短期大学部紀要』第41号，pp.51-60.
- 藤原一子（2018）「保育士養成・教員養成課程に在籍する学生がピアノ学習において難しいと感じている項目の分析(1)—ピアノ演奏技術【音高】に着目して—」『東海学園大学教育研究紀要』第2巻，pp.39-49.
- マクドナルド・ドロシー・T、サイモンズ・ジェーン・M（2003）、神原雅之、難波正明、里村生英、渡邊均、吉永早苗共訳『音楽的成長と発達—誕生から6歳まで—』溪水社.
- 三木康子（2006）『『バイエルピアノ教則本』にみられる奏法指導の特徴』『音楽教育実践ジャーナル』3巻2号，pp.104-109.
- 宮脇長谷子（2001）「保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題—養成校へのアンケート調査を通して—」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』15-W号，pp.1-11.
- 向田あかり（2012）「初見試奏時における音高の認識と表出に関する研究」『中国四国教育学会教育

学研究紀要』第58巻, pp.230-234.

J・L・マーセル、M・グレーン (1965) 供田武嘉津訳『音楽教育心理学』音楽之友社.

S.Furneaux and M.F.Land (1999) 「The effects of skill on the eye-hand span during musical sight-reading」 Proceedings of the Royal Society. Biological Sciences, 266 (1436), 2435-2440.